日本記号学会第 43 回大会個人研究発表・要旨

2023 年 6 月 17・18 日
東海大学・品川キャンパス

理由、運、意味

人生の意味の哲学における道徳主義的見解の批判

渡辺　一樹（東京大学・日本学術振興会）

本発表は、人生の意味と道徳的なあり方との間の必然的関係を否定する。すなわち、有意味な生にとって、道徳的であることは必要条件でも十分条件でもないことを論証しようとする。

「人生の意味」という概念をめぐって、多くの哲学の論文が現代の英米圏において書かれてきた。そこでは、「ある人生は有意味である（a life is meaningful）」という語りの条件の検討を通して、「人生の意味」の性質が分析されてきた。この分野において注目すべき問いのひとつとして、「道徳と人生の意味のあいだに必然的な関係はあるか」というものがある。本発表が取り組むのはこの問いである。本発表は、そして、「道徳と意味のあいだに必然的な関係はない」という反道徳主義的な見解を支持するために、哲学者バーナード・ウィリアムズが提案したふたつの議論を再構成し、それを擁護する。この議論とは、ひとつは生きる理由、つまり「定言的欲求」の観点からの議論であり、いまひとつは運と人生の関係からの議論である。第一の議論は、ひとの生きる理由に着目する。人生の意味というものがあるとすれば、それは個人の生きる理由を供給するものとして理解されてきたが、このように考えるとき、道徳は生きる理由を必然的に供給できないために、道徳的な生が意味の十分条件であるという立場が否定される。このことは、絶望や退屈といった現象において典型的である。第二の議論は、運の現象に着目する。人生の有意味性は運に左右されると理解されるのに対して、人生の道徳性は同様に運に左右されるわけではない。このように考えるとき、不道徳な人生が運良く有意味でありえるのであり、道徳的な生が人生の意味の必要条件であるという立場が否定される。

本発表は以下のような構成になっている。まず、道徳と人生の意味の関係についての先行研究の立場を整理する。そこでは、「（マザー・テレサのような）高度に道徳的な生は必ず有意味である」という立場と「（ヒトラーのような）高度に反道徳的な生は必ず無意味である」という立場の二つの道徳主義的見解が析出される。次に、本発表は、上記の二つの議論によって、この二つの道徳主義的見解を否定する。最後に、本発表は想定される反論に応答する。

参考文献

Williams, Bernard (1973). *Problems of the Self: Philosophical Papers 1956-1972*. Cambridge U. P.

Williams, Bernard (1981). *Moral Luck: Philosophical Papers 1973-1980*. Cambridge U. P.